慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	本邦中高年女性における不定愁訴の実態についての検討
Sub Title	
Author	池田, 俊之
Publisher	慶應医学会
Publication year	2005
Jtitle	慶應医学 (Journal of the Keio Medical Society). Vol.82, No.4 (2005. 12) ,p.10-
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	号外
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069296-20051202-0010

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

本邦中高年女性における不定愁訴の実態についての検討

池　田　　俊　之

内容の要旨

（目的）近年、欧米だけでなく本邦でも多くの医療機関において更年期障害の治療が行われているが、更年期における中高年女性の身体的および精神的変化は、卵巣機能低下に起因する女性ホルモンの分泌低下だけでなく加齢や社会心理学的要因などにも修飾されることにより様々な不定愁訴として出現する。そのため、更年期障害の概念は年代や地域によっても異なり、更年期障害の診断に明確な診断基準は存在しないのが現状である。これまでに我々は、本邦と欧米では更年期障害として出現する諸症状が異なることにより更年期障害の概念に差異が生じている仮説を検証する目的で当科更年期外来の初診患者を対象とした調査研究を施行した結果、「全身倦怠」や「肩こり」が、欧米では最高頻度で認められる「hot flush」や「発汗」よりも症状の出現頻度および重症度が高いことを報告した。ただし、これらの結果のみから本邦中高年女性の更年期における諸症状の一般的特徴と結論づけることは困難である。そこで、本研究では本邦一般健常中高年女性にみられる不定愁訴の実態について検討する目的で慶應式調査票を用いたアンケート調査を施行し、得られた結果を解析検討した。

（方法）平成13年４月から平成16年３月までに埼玉県内各地域の保健センターに訪れた40歳以上60歳未満の一般健常中高年女性398名を調査対象とした。調査40項目の症状毎に有症率と重症率を算出し、同時期に慶應義塾大学病院産婦人科更年期外来を受診した初診患者309例を対象とした同内容の調査結果と比較検討した。また、対象を閉経前期、閉経周期、閉経早期、閉経後期の４群に分類し、４群間における各症状の有症率と重症率を比較検討した。

（結果）以下の事実を見出した。①一般健常中高年女性に高頻度で出現する症状の大半は加齢的変化に関連する症状であった。②更年期外来受診者と同様、一般健常中高年女性においても「腰が痛い」「肩こりがある」等の症状における重症度が高い傾向を示した。③更年期外来受診者と同様、一般健常中高年女性においても更年期障害の代表的症状とされる「hot flush」や「不眠」は最頻度の症状ではなく、閉経周期や閉経後早期に多く認められる傾向を示した。

（結論）一般健常中高年女性における更年期の不定愁訴の頻度および重症度は、更年期外来受診者と同様の傾向を示した。今回の調査により、欧米とは異なる日本人中高年女性全般における更年期不定愁訴の特徴が存在することを明らかにした。

論文審査の要旨

更年期障害は症状や発症頻度に人種差や地域差があるといわれ、日本と欧米ではその発症要因における概念が異なり未だに統一した診断基準が存在しない。また、世界的にも更年期女性に出現する諸症状の実態についての検討がなされていないのが現状である。本研究では、慶應義塾大学産婦人科更年期外来受診者を対象に行った先行研究にて得られた「欧米とは異なる更年期不定愁訴の特徴が存在する」という結論が健常中高年女性という更に一般化された対象集団においても同様であるという仮説を検証する目的で、埼玉県内各地域の保健センター来訪者を対象として、慶應式更年期調査票を用いて不定愁訴の実態（有症率と重症率）とその症状群の月経状況との関連を更年期外来受診者との結果と比較して検討した。

審査では、まず更年期症状はその有症率ではなく発生率を検討する必要があるとの指摘がなされた。これに対し、今回の研究では最近出現した症状を有する患者の割合という意味において有症率という用語を使用したとの回答がなされたが、用語の使い方に誤解を招く可能性があることが指摘された。次に「hot flush」や「発汗」が単なる加齢現象ではなく女性ホルモン低下による症状とされる根拠について質問がなされた。これに対して、更年期外来受診者における縦断的調査で、それらの症状は女性ホルモン低下により出現するが時間的経過により消失することが明らかにされていると回答された。また、更年期障害をホルモン的な障害、精神障害、器質的障害等に分けて議論すべきではないかとの検討課題がなされた。さらに、不定愁訴を訴える更年期外来受診者の中にはうつ病患者が混在している可能性があるとの指摘がなされた。これに対して、当科更年期外来ではSDS（Self-Rating Depression Scale）にて抑うつの評価を行い、必要を認めた症例については精神科受診としていると回答された。一方、更年期障害に対する治療内容についての質問がなされ、長期間のHRT（Hormone Replacement Therapy）の危険性を指摘した米国におけるWomen's Health Initiativeの報告もあり、HRTの他に漢方療法、自律神経調節薬、抗うつ薬、カウンセリング等を症例ごとに選択していると回答がなされた。最後に、一般健常中高年女性と更年期外来受診者の比較検討には、更年期外来受診者が身体症状を訴える傾向が多いことから、精神症状と身体症状とに分けた分析を行うとさらにその差異が明確となるのではないかとの提案がなされた。また、一般健常中高年女性と更年期外来受診者には異なった性格傾向があるのではないかとの指摘がなされた。これらについては今後検討すべき課題とされた。

以上のように、本研究ではなお検討すべき課題はあるものの、本邦における一般中高年婦人の不定愁訴の実態を同一の調査指標を用いて明らかにした点で有意義な研究であると評価された。

論文審査担当者　主査　産婦人科学　吉村　泰典
精神神経科学　鹿島　晴雄　　衛生学公衆衛生学　大前　和幸
内科学　鈴木　則宏
学力確認担当者：北島　政樹、鹿島　晴雄
審査委員長：鹿島　晴雄
研究指導者：野澤　志朗（産婦人科学）

試問日：平成17年 7月 5日